

天理参考館 ニュースレター

天理大学附属天理参考館

発行日：2007. 9. 18

発行：天理大学附属天理参考館

編集：広報普及

第56回企画展

モチゴメの国ラオス

—メコン河流域の暮らし—

会期／10月17日(水)～1月7日(月)

ラオスを中心としたメコン河流域には数多くの民族集団が暮らしています。モチゴメ「カオ・ニャオ」を主食として暮らす彼らが製作し、使用していた民族色豊かなモノ(素材・製品・道具)を通して、同河流域に暮らす人々の生活様式を、歴史的な比較の視点を持ちながら描写します。

当館をはじめ各関係博物館や研究者所蔵のモノ・写真資料および調査活動時の



モチゴメの収穫 ラオス、ボンサーリー県

収集資料を選び、分かりやすく展示します。

この企画展は2003年度より、総合地球環境学研究所と国立民族学博物館で進められてきた研究プロジェクト*に当館も加わり、両者と連携して進めてきた研究成果の一端を公開するものです。人間文化研究機構とも連携しています。企画展開催中には左記の通り各種イベントを行います。

メコンワークシヨップ

ラオスのモチゴメ観察会

日時／11月10日(土)午後1時30分

会場／当館研修室

定員／30名

講師／武藤千秋氏(岐阜大学大学院)

材料費／700円

備考／飯かご「ティップ・カオ」のお土産つき

土産つき

竹で呼び笛を作る

日時／11月18日(日)午後1時30分

会場／当館研修室

定員／30名

講師／川野和昭氏(鹿児島県歴史資料

センター黎明館)

材料費／700円

ワークシヨップを受講いただくには、あらかじめ申し込みが必要です。

シンポジウム

「メコン河流域の暮らしと医療

—天理教ラオス巡回医療隊の思い出—

日時／12月8日(土)午後1時30分

会場／当館研修室

講師／中村哲氏(国立国際医療センター研究)

タリ研究所)

パネラー／木田光雄氏、小野喜雄氏、岡田雅幸氏、平山好美氏(元天理教ラオス巡回医療隊)

定員／100名

列品解説

日時／10月26日(金)・11月26日(月)

いずれも午後1時30分

会場／当館 3階企画展示室

担当／吉田裕彦(当館学芸員)

共催／総合地球環境学研究所、国立民族学博物館
協賛／(財)天理よろづ相談所南山大学人類学博物館
(財)奄美文化財団・原野農芸博物館

*「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究」1945-2005



結婚式の再現展示

新展示

古代天理の火葬墓たち

― 杣之内火葬墓と西山火葬墓群 ―

会期 / 1月23日(水)～3月3日(月)

文献によれば、わが国の火葬は、文武4(700)年に入唐留学僧の道昭を火葬したことに始まるとされています。その後、大宝3(703)年に持統天皇が天皇では初めて火葬され、以後、文武、元明、元正と歴代の天皇が火葬されています。火葬の風習は奈良時代の貴族の間にも広まり、火葬された骨は金銅製やガラス製、奈良三彩などの高価な蔵骨器や木櫃、土師器・須恵器の壺・甕などに入れられ埋葬されました。時には蔵骨器を石製の外容器などに納めて埋納されることもありました。しかし、奈良時代にはまだ、こうした火葬の風習は限られた階層の人々



杣之内火葬墓の海獣葡萄鏡と木櫃

の間で行われた葬法で一般的なものではありませんでした。

つづく平安時代以降、火葬の風習は全国的に広がってゆきます。蔵骨器には日常使われる甕や壺が多用され、蔵骨器が納まる程の穴を掘って埋納されました。



西山1号墓の蔵骨器出土状況

今回の新春展では火葬が始まり貴族層に広まってゆく段階の例として杣之内火葬墓を、そして、それが広く普及してゆく段階の例として、奈良時代から平安時代の西山火葬墓群を取り上げ、古代の火葬墓の世界を紹介したいと思えます。杣之内火葬墓は版築と呼ばれる高度な工法を採用してつくられた火葬墓です。ここではその構築法や副葬品の中国唐代の海獣葡萄鏡をご覧頂き、奈良時代の貴族の葬制の一端を紹介します。また、西山火葬墓群では様々な種類の日常用の壺や甕が蔵骨器として利用されており、その多様性をご覧いただければと思います。このほか、当時としては珍しい蔵骨器用としてつくられた土師器の壺も展示します。

列品解説

日時 / 1月25日(金)・2月26日(火)

いずれも午後1時30分から

会場 / 当館 3階企画展示室

担当 / 日野宏(当館学芸員)

発掘調査

東大寺山古墳の出土遺物

東大寺山古墳は天理市樺本町にある4世紀中頃に造られた前方後円墳で、昭和36年から37年に当館が発掘調査を行いました。その時には多くの副葬品が出土しましたが、とりわけ「中平」(西暦184年～189年)の年号を金象嵌した大刀があつたことは、その後、出土遺物全てが国の重要文化財として指定されたことからその重要性が窺えます。2世紀から3世紀頃の古代日本と中国との関係を知る手がかりとなる資料です。

出土遺物の種類は、武器類には鉄製の大刀や剣・槍・鏃、青銅製の鏃、盾に取り付けた巴形銅器などがあります。石製品は管玉・勾玉・璆玉のほかには鏃形石・石釧・車輪石・鏃形石製品・筒形石製品や土器を写した小型壺などがあります。この時期の古墳でよく出土する鏡はありませんでした。また、皮製の鎧もありました。

出土遺物は盗掘によりかなり荒らされ、石製の腕飾類などは大部分が盗掘品のなかにありました。武器類は木棺を納めた粘土槨の両側に残っていました。中平銘の大刀はその1本です。粘土槨は南北方向に長く、大刀は東側に13本、西側に7本ありました。東側の大刀は把頭の飾りが鉄・青銅製の環状形のものであ



鉄製素環頭把頭



付け替えられた青銅製環頭

り、西側のものは木製であつたようです。あるいは環状の把頭は中国からの舶載品で上等と考えられていたのかもしれない。武器類が多いことから被葬者は男性だったのでしょうか。現在、これらの物は東京国立博物館に収蔵・展示されています。

ところで、中平銘の鉄刀には鉄製素環の把頭ではなく、青銅製で特殊な文様のある日本製の把頭が付けられていました。素環の把頭はこの時期以降次第になくなってきますが、東大寺山古墳の頃にはすでに時代遅れの古い型式とされており、新たな青銅製の把頭に付け替えたのかもしれない。

鉄刀が造られたのは2世紀後半であり、古墳に副葬されたのが4世紀ですから200年間あまり伝えられたのです。その間、どのように中国から当時の日本にもたらされ、埋められたかを想像するのは楽しいことです。3世紀には邪馬台国の女王卑弥呼が使者を出し、いろいろな品物をもたらしていますが、その中にも五尺の大刀が含まれており、中平銘鉄刀はそのような品物であつたのかもしれない。11月24日には当館などが主催して「東大寺山古墳シンポジウム」が催されます。議論白熱すること間違いありません。(山内)

見所の 朝鮮時代の石人像

天理参考館は昭和13年、天理教会本部神殿の東側「東屋敷」にありました。当時の写真を見ると、正面玄関に向かい合うように一対の石人像が立っています。この石人像はその後転々とし、現在は天理大学第一体育館の南側の庭に移されています。花崗岩質の石材を武人風に加工した高さ約2mの人物像で、少々苔むし風化も始まっていますが、17世紀以降の朝鮮時代の貴族の墓に立てられていたものと推定されます。この他にも、旧天理外国語学校校舎の前庭に朝鮮時代の石燈籠一基があり、天理大学研究棟の北側玄関にも石獅子一頭が蹲踞しています。この獅子は天理図書館の北側隣にあるもう一頭と対をなすものでしょう。縁あって天理にやって来た石造物たち、長く大切に保存してほしいと思います。(竹谷)



天理大学第1体育館前の「朝鮮時代の石人像」

資料紹介 天理勘治(てんりかんじ)

来年2月末から3月にかけて東京の天理ギャラリーにおいてこけし展を開催します。こけしは皆様ご存知のように、丸い顔に細い胴、伝統的な模様を描いた東北地方の郷土人形です。同じように見えますが、形、顔の表情、胴の模様など、産地によって長い伝統に基づく約束事があり、これを逸脱することはできません。産地ごとにおよそ十一系統に分かれると言われています。

目をつぶってこけしを思い浮かべてみてください。皆様イメージするこけしは大方が鳴子系だと思えます。鳴子系は華やかな胴の花模様、安定感のある形、首を回すとキイキイと鳴るのが特徴で、現在でもこけしの一大産地です。図版のこけしが鳴子系の名人と評される高橋勘治の作品です。井伊大老が桜田門外で暗殺された万延元年(1860)の生まれで、作品は三、四本しか現存しません。そのなかの貴重な一本で、こけしファンからは「天理勘治」と呼ばれています。肩の丸味と中央で少しくぼんだ絶妙のフォルム、パツと目を引く派手で大胆な胴模様は他の追随を許しません。彼の作は特に名前を冠して「勘治こけし」と称されるゆえんです。(幡鎌)



宮城 明治時代 高25・2cm

資料紹介 異形皿形土器 カップ・アンド・ソーサー



紀元前11世紀頃 高5.1cm 口径15.8cm

当館が収蔵しているイスラエル国テル・ゼロール遺跡の出土品のなかに、一風変わった土器がありま。丸底の皿で、内側の見込み部分に輪状のものが貼り付けられた容器です。初めて見た時は、ゆで卵でも置くのかと思いましたが、皿が丸底なのは不思議です。類例を調べると、内側に貼り付けられていたものは低い輪ではなく円筒状のものだと分かりました。

残念ながら当館の収蔵品は円筒の上部が欠損していますが、皿の縁と同じ高さか、それよりやや高いところまで円筒は伸びていたと考えられます。まるで皿にカップがのせられているように見えますから「カップ・アンド・ソーサー」と称されています。けれども円筒部分(カップ部分?)は皿にしっかりと貼り付けられているので、名前の通りに「お茶のセット」として使うことはできません。

それなら実際は何に使われたのでしょうか。まだはつきりとしたことは分かっていませんが、祭儀用の容器とも言われています。丸底の皿は脚台にのせれば安定しますし、カップ部分に神酒など特別な液体を入れたのかもしれない。一方、ランプではないかという意見もあります。皆さんなら、この変わった容器をどのように使われますか?(飯降)

発掘調査 布留(石田・ツク田)地区

この調査は、現在の埋蔵文化財天理教調査団の前身である布留遺跡発掘調査団が、発足してから初めての発掘調査となったため意義深いものです。

調査地は布留遺跡の中心地と考えられている場所で、布留川の右岸約80mの扇状地上に位置します。調査のきっかけは、天理教おやさとやかた東石第一棟建設に伴うものでした。建設工事が始まると、大量の土器が出土し、文化財保護の観点から緊急の発掘調査が必要とされたのです。調査は建設工事と平行して、昭和46年3月から4月にかけて行われました。調査にかかる時点で、調査可能な範囲はきわめて限られており、石田・ツク田両地区合わせて、かろうじて約150mを調査することができました。

調査の結果、明確な遺構は検出されませんでした。布留川の氾濫原を示す砂礫層の上に、遺物包含層が部分的に残り、自然の流路も確認されました。この遺物包含層や自然流路からは古墳時代中期の土師器・須恵器のほか、滑石製の有孔円板や白玉が出土しました。出土した須恵器の中には初期の特徴をもつものも含まれていました。また、小さな土器でも丹念に採集した結果、卵の殻のように薄い土師器が製塩土器であることもわかりました。今では内陸部の遺跡から製塩土器が出土することは、よく知られています。が、当時としては大変珍しい遺物として注目されました。

(宮野)



公開講演会
トーク・サンコーカン

広く一般の方々に当館をさらに身近な施設として利用していただき、諸文化の理解と教養を深めていただくことを目的とする公開講演会です。講演は、いずれも午後1時30分(受付は午後1時)から当館研修室。受講無料(入館料が必要)。

『ヤマト王権を語る』シリーズ(全5回)

大和盆地の東部から南部の山麓にかけて、東大寺山古墳群・大和古墳群・柳本古墳群・纏向古墳群と呼ばれるヤマト王権の大王墓が築かれています。これらの古墳群からは邪馬台国の女王卑弥呼が魏の皇帝から下賜されたと考えられる三角縁神獣鏡や中平銘鉄刀などが出土し、また纏向古墳群に隣接する纏向遺跡は邪馬台国の宮都と推定されています。邪馬台国から初期ヤマト王権の成立について、いつしよに考えてみませんか。

第177回 『ヤマト王権を語る』シリーズ
『ヤマト発祥の地と大和古墳群』

月日/10月27日(土)
講師/竹谷俊夫(当館学芸員)

初回の講座では、先ず大和盆地東南部に広がる古墳群の全体像を把握した後、大和古墳群を取り上げます。大和古墳群には発掘調査の行なわれた中山大塚古墳や下池山古墳、船の線刻画埴輪が出土した東殿塚古墳などがあり、また継体天皇の皇后手白香皇女の陵とされる西殿塚古墳も存在します。この地域は地名「ヤマト」発祥の地であり、古式の大和神社など古墳以外にも注目すべきものがたくさんあります。

第178回 『ヤマト王権を語る』シリーズ
『邪馬台国時代の墳墓と遺跡』

月日/12月15日(土)
講師/小田木治太郎(当館学芸員)

奈良県桜井市の箸墓古墳は最古の古墳と言われます。箸墓古墳とその周辺は、まさにヤマト王権誕生の地です。この地には箸墓古墳の以前から、たくさんの人々が暮らすムラが営まれ、墳墓もたくさん築かれました。最古の古墳ができあがる前夜、つまり邪馬台国時代のヤマトの様子を見てみましょう。

第179回 『ヤマト王権を語る』シリーズ
『黒塚古墳と三角縁神獣鏡』

月日/1月19日(土)
講師/藤原郁代(当館学芸員)

奈良県天理市の黒塚古墳は、33枚もの三角縁神獣鏡が出土したことで有名です。そして、奈良県では黒塚古墳以外にも50枚を超える三角縁神獣鏡が知られています。当館ではそのうちの3枚を所蔵しています。奈良県の古墳と三角縁神獣鏡、そのほかの副葬品を手がかりに、ヤマト王権について考えてみましょう。



第180回 『ヤマト王権を語る』シリーズ
『東大寺山古墳と鉄刀』

月日/2月23日(土)
講師/山内紀嗣(当館学芸員)

東大寺山古墳からはたくさんのお宝や武器類や右

製品などの副葬品が出土しています。とりわけ鉄刀は20振りもあり、製鉄技術のない当時にあつては大変貴重なものでした。その中には我が国最古の金象嵌銘のある刀も含まれ、どのようなルートでもたらされ、奈良盆地東部の古墳に副葬されたのかを政治的背景を含めて考えます。

第181回 『ヤマト王権を語る』シリーズ
『大和古墳群と中世山城』

月日/3月15日(土)
講師/太田三喜(当館学芸員)

奈良盆地東部の山中(東山内)には、いくつもの山城が知られ、ひとときわ目立つのが龍王山城です。この城の出入口付近には、中山大塚古墳や黒塚古墳など、多くの大型古墳があり、大和古墳群が形成されています。中世にはその古墳群を壊して砦にした人々がいまいました。その人間像に迫ります。

お知らせ
「関西文化の日」入館無料

「関西文化の日」は関西(2府7県)圏域内の方々に広く美術作品や資料に接する機会を提供し、美術・学術愛好者の増大を図るとともに圏域外に向けても、文化が息づく関西を広く、かつ力強くアピールして圏域への集客を図ることを目的に催されます。当館は本年もこの趣旨に賛同し、左記の3日間無料で常設展示および第56回企画展「モチゴメの国ラオス ―メコン河流域の暮らし―」を観覧いただけます。

◇期間/11月17日(土)〜19日(月)

利用案内

開館時間 午前9時30分〜午後4時30分
(入館は午後4時まで)
休館日 毎週火曜(祝日の場合は翌日)
ただし毎月25日〜27日、4月17日〜19日、7月26日〜8月4日は開館
創立記念日(4月28日)
夏期(8月13日〜17日)
年末年始(12月27日〜1月4日)

入館料 大人400円、団体(20名以上)300円
小・中学生200円
交通 電車/JR桜井線天理駅・近鉄天理線
天理駅下車 南東へ徒歩約30分
車/西名阪道天理I.C.から国道169号線
を南へ約3km 駐車場あり(無料)

その他 団体見学は事前にご連絡願います
世界の生活文化と考古美術の博物館
天理大学附属天理参考館

〒632-8540
奈良県天理市守目堂町250番地
Tel 0743-6318414
Fax 0743-6317721
URL <http://www.sankokan.jp/>

編集後記

二ニュースレター第3号を発行しました。今号は平成19年度後期に予定している展覧会、イベント情報や当館収蔵資料の紹介を掲載しました。また、当館が発掘調査を行った東大寺山古墳を紹介し、今秋開催するシンポジウムへの誘いと致しました。多数ご参加お待ちしております。(片山)